
最も輝く星となれ！ ~捨てられたハスキー犬と少年の想い~

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最も輝く星となれ！～捨てられたハスキー犬と少年の想い～

【Zコード】

Z8935B

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

空を見上げているとひとときわ輝く星が在る。その星を見ていると俺はあの犬のこと思い出せずにはいられない。

少し前から犬を飼い始めた。実は少し前まで住み込みで犬と関わる仕事をしていたのだが、家の都合もあり仕事を辞めた。その時に飼いはじめた犬が今の犬だ。黒のラブラドール・レトリバーの女の子。今思えば俺の人生は小さい頃から犬と歩んできた気がする。とは言つても幼い頃の出来事なんて新しい記憶に消されて細かいところまではなにも覚えていないのが普通だ。

でも、それらの犬達との思い出の中に、唯一決して忘れることの出来ない物語があるとすれば、それはあのシベリアン・ハスキーのリュウのことだろう。

あれはまだ、俺が小学生に上がったばかりの頃、世間はいわゆるペットブームという波が押し寄せてきた最中で、特に大型犬であるシベリアン・ハスキーがよく流行った時代。どこの家にもハスキーがいるとまで言われたほどのハスキー・ブームでその狼のようなルックスと大型で強固なイメージがあつたハスキーは人気の渦中にあつた。

余談ではあるが、ハスキーと言えば北海道では犬ぞりレースなどで活躍している犬である。その力強い肉体は人間の心を魅了していく。また南極物語で知られる犬もハスキーである。ハスキー自体名前からも分かるようにもどが冬極の犬であるため冬の寒さに強い身体をしている。その反面夏には弱い。とは言つてもどの犬も基本的には夏には弱く冬には強いものではあるが。ちなみに同じ大型犬でも忠犬ハチ公はハスキーではない。

そんな世間で人気があつたハスキーではあつたが、一方で子犬か

らは想像できない巨大な犬へと成長するということとその性格を理解せず飼う人が続出し、飼いきれない犬として捨てられていく現実があつた。

そんな時だつた俺があのリュウと出会つたのは 。

（十数年前）

「一番乗り～！！」

まだ小学生にあがつたばかりの俺は子供らしくとつても活発な子供だつた。毎日学校にきては当時人気があつたドッジボールをするために運動場の陣とりのため朝早くから登校していたのだ。一番乗りとは言つてもほとんど近差である。すぐに運動場はいっぱいになる。鉄棒で遊ぶもの、サッカーをするもの、縄跳びをするもの、鬼ごっこをするものなどでいっぱいになる。

俺もすぐには友達とドッジボールを楽しむ。そうやつて朝の休み時間を過ごすのだが、この日はいつもとは違つていた。校門付近から叫び声のようなものが聞こえてくるのだ。俺はそんな声に気を取られ友達にボールを当てられてしまつ。それでも俺は、校門のほうを見た。そこには大型の犬が校門を通つて校内に入つてきていた。

子供の中には犬の苦手な人もいるわけで、そういう人達は立ち上げれば自分よりも大きな犬を見て怯える。犬にとつては遊んでいるつもりでも乗りかかられれば怪我もしてしまつ恐れがあり、小学生からすれば非常に危険な存在だったが。俺は小型犬を家で飼つてたこともありそんな恐怖は全然なかつた。それでも用務員のおじさ

んがやつてきてその犬を取り押さえていた。俺は犬の元に行きたか
つたがチャイムが鳴つてしまつたため仕方なく教室へと戻るしかな
かつた。

だけど、俺はすぐにその犬に触ることが可能になつた。

昼休み、いつものように運動場へとドッジボールのために陣を取りに行つたのだが用務員室を見ると表に朝いた犬が繫がれていたのだ。俺はすぐにその犬の元へと駆け寄つていく。

すぐ近くで見るととても大きい。大きな身体に大きな耳。眼を見ると両目の色が違つて片方の色が真っ白だ。とても大きなその身体はとても汚れていて少しやせ細つているようにも見える。あきらかに捨てられて何日も経つている犬だと思つ。

それよりも驚いたのは犬のその大人しさ。巨大で凶暴そうな風潮とは裏腹にとても温厚ですぐに懐いてきた。俺はそれがとてもうれしくそのままは友達とのドッジボールをそつちの内でその犬と遊んでいた。

用務員のおじさんが言つていた。この犬はハスキーという犬だと
いうこと、恐らく捨てられてしまつた犬だということ、保健所とい
うところへ引き渡すということ。そして保健所で殺されるとい
う。俺はそれを聞いてその犬をかばうように用務員のおじさんに言
つた。

「この犬は俺が連れて帰る！」

その後、用務員のおじさんといかなる取引があつたのかはよく覚えてはいながともかくにも俺はそのハスキーをつれて帰ること

になった。帰りにその犬を引き取つて家へとつれて帰る。帰りに友達とそいつの名前を付けた。名前はリュウだ。今思えばオスではなかつたのかも知れないが。

とにかくリュウは俺が引き取り、家へと連れかえろうとしていた。それにしてもあんな大型犬をよく小さな俺が家までの道のりを連れて帰れたものだ。たぶんリュウが気を利かせて俺が転ばないようにしていてくれたのだろう。

家に帰つてきてから俺は気がついた。家に連れていっても親が飼うことを許すはずがないと。そこで近くにある無人の小屋に繋いでリュウを飼うこととした。リュウをそこに繋ぐと俺はすぐに近所の友達を連れてリュウと遊んだ。

それからは毎日、朝リュウにご飯を持っていき、帰りも学校のパンなどを持ち帰つてリュウにやつていた。そして毎日遊んでとても楽しかったのを覚えている。

そんな日が何日か続いたある日、いつものようにリュウにご飯をやりにいった俺は驚くべき光景を目にした。

リュウがいない。

そこにはリュウを繋いでいたロープだけが残されリュウの姿はどこにもなかつた。

俺は探した。友達にも言つてみんなで必死に必死に探した。それでも結局リュウを見つけることはできなかつた。リュウはどこにいつてしまつたのか。幼い俺達にはなに一つできなかつた。それからも毎日、リュウが帰つてきているんじゃないかと俺はその小屋へと

足を運んだ。それでもやはりリュウは帰つては来なかつた。

それから数日後、俺は友達と遊んで帰る途中、まったく見ていないかつたのか。車とぶつかつた。自転車は凹んで原型を留めていない。俺は吹き飛ばされ膝に怪我を負つた。けど、それだけだつた。自転車が原型を留めないくらいの勢いでぶつかつたのに、他にはどこにも怪我をしていない。それは奇跡なのか見るとそこには大きな犬が倒れていた。

俺はそれが一目でリュウだと分かつた。俺とぶつかつた車を運転していた人が出てきてすごく動搖している。しきりに俺の心配をしている。でも俺はリュウのことが心配だつた。おばさんを振り切つて俺はリュウの元へと走る。リュウは血を流していた。それでも意識はあるようで必死に起き上がるとしている。おばさんは動搖からかまつたく犬を見てはいない。

リュウは立ち上がりヨロヨロと歩きだした。俺はおばさんの車に乗せられ家まで送られた。余談だが、おばさんは自ら警察に行つたようだ。幸い俺の怪我がたいしたことがなかつたのも幸いしておばさんは特別な罪にはならなかつた。でも俺に怪我が少なかつたのはリュウのおかげ。

すぐに車に乗せられたからせつかく会えたりュウがどこにいったのか分からぬ。怪我をしている。まだ生きているのだろうか。俺の心は不安でいっぱいになつた。

それから数日。

学校の帰り道、友達とふざけあって帰っている最中。俺は背後からいやら視線を感じて振り返る。そこには、大型のリュウと思しきハスキーがこっちを見て立っていた。大きな身体に大きな耳、両目はそれぞれが違う色の目。俺はその目に吸い込まれるようにずつと田を離すことができなかつた。

しばらくその状態が続いた後、その犬は振り返り俺から離れるよう歩いていった。そうして角を曲がり姿を消した。俺は友達と共にすぐにその犬の後を追つて角のところまでいったのだが、そこに犬の姿はなかつた。

あれはきっとリュウだったのだと思う。最後に俺に会いに来てくれたのかも知れない。その時、俺はまだリュウと出会つて僅か2週間ほどしか経つていなかつたと思う。今思うと、リュウと最初会つた時から俺はリュウに心惹かれた。リュウも俺に会つために学校にきたのかもしれない。

この話を大きくなつてから親にしたことがある。そこで俺は驚きの真相を聞くことになつた。それはさらにさかのぼること数年まささらに幼かつた俺はどこからともなく子犬を拾つてきらしい。その後数日間家で飼つていたのだが、ある日不注意からその犬は逃げてしまつたらしい。必死の搜索にも関わらず結局その犬は見つかることなく、不憫に思つた親は小型の犬を飼つてくれたのだ。

ハスキーという犬種は一年で驚くほど大型に成長する。俺がどこからともなく拾つてきた子犬が数年後再び俺の前の姿を現し、俺の命を救つてくれたのだとしたら。

リュウはもうこの世にはいないだろ。でも夜、空を眺めると
ても輝く星を見つけることが出来る。その星を見るといふのあの
不思議な眼を思い出す。今も、俺のことを見守ってくれて
いるのか。

俺はそんなこともあってか犬がとても好きになっていた。俺は犬
と関わる仕事に就き毎日犬と過ごしていた。今は都合が悪くそれは
出来ないが将来的には俺はもう一度犬と関わる仕事に就こうと思つ
ている。

リュウが命を賭けて救ってくれたこの命で 。

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。この物語は実話です。細かいところまではあまりよく覚えていないのでそこらあたりはもうやですが。

リュウはとても不思議な犬でした。なにより不思議だったのはその眼です。リュウの白い眼にはなにやら力があったのだと思います。僕が犬を本当の意味で好きになれた出来事であり、この出来事が後に僕の人生に大きく影響しています。この物語はそんなリュウとの思い出を一生残す意味も込めました。

この物語を今も空の輝く星となって見守ってくれているリュウに捧げます。リュウ、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8935b/>

最も輝く星となれ！～捨てられたハスキー犬と少年の想い～
2010年11月12日16時29分発行